

三鷹中央学園



平成27年度 三鷹中央学園の評価・検証 結果報告

検証項目	(1) 人間力・社会力の育成 ○他者との適切な関係を構築する力の育成 ○他者と共に自己実現を図っていく力の育成 ○地域や社会等へ貢献する力の育成 ○その他
目標	①9年間の指導計画におけるキャリア・アントレプレナーシップ教育を充実させる。 ②地域の人材を積極的に活用した教育活動を推進し、豊かな学習活動を実現する。
取組	①コミュニティ・スクール委員会及びみたかスクール・コミュニティ・サポートネット等の支援のもと、「9年間の学園防災教育」の系統性を踏まえた実践を基に、指導計画を作成する。その際、三鷹中央学園版副読本「カンガエル地域防災」を活用するとともに、地域防災活動への参加を推進する。 ②コミュニティ・スクール委員会との連携による地域人材を活用した教育活動を、系統性・連続性を明確にして、多様に展開する。
成果	課題と改善方策
①みたかスクール・コミュニティ・サポートネットとの協働により、学園防災副読本「カンガエル地域防災」を活用し、9年間の系統性を視野に入れた防災授業を全学年で実施した。11月に実施された地域防災訓練は、学園生が防災授業の成果を生かす実践の場となった。学園アンケート肯定率は、82%と高く、三鷹中央学園の柱となる活動として定着した。	①防災授業の学びの実践の場として、地域の防災訓練に学園生が参加するしくみを継続するため、年度内に次年度の実施計画を策定することが必要である。⇒28年度は、連雀・駅前地区ともに10月30日(日)に決定。27年度を踏まえて実施する計画になっている。
②地域人材等(企業等の外部人材を含む)を活用し、教員との協働授業・授業サポート・放課後学習教室等、多様な人材との出会いによる教育活動を意図的・計画的に進めた。学園アンケートにおいて、78%の肯定回答があった。	②コミュニティ・スクール委員会の学習ボランティア担当・地域人材担当との連携を一層密にして、地域等の外部人材を活用した継続的な教育活動を充実させる。⇒年間実施計画の早期の策定による学校間調整が必要である。
検証項目	(2) 学園運営について ○小・中一貫教育校の学園組織の活性化 ○小・中一貫教育校の教員間、学校間の交流の円滑化 ○小・中一貫教育校の校務、会議の効率化 ○その他
目標	①学園運営の円滑化・効率化・活性化を図るための組織についての検証を行う。 ②学園・学校評価内容の改善と評価結果の分析により課題を明確化する。
取組	①学校間の連携を図るために、学園校長会、学園教務部会、生活指導部会、交流部会、研究推進部会、「総合的な学習の時間」部会、情報部会、小中一貫教育コーディネーター連絡会を月1回設定する。また、校務支援システムを活用した会議の効率化を図るとともに、学園情報の「見える化」を推進し、学園ホームページとSNS及び学園だより、保護者会、学校説明会等において、学園の取組を周知する。 ②保護者、児童・生徒の声を反映させた評価結果について、コミュニティ・スクール委員会とともに課題を明確化し、28年度の教育計画に反映させる。
成果	課題と改善方策
①年間10回の学園研究会において、実のある会議・効率的な運営に向けて、校務支援システムの活用により、事前の資料提供及び意見集約に努めた。学園情報の「見える化」を図るため、学園ホームページ・学園だよりを活用するとともに、学校だよりには、3校の「短通信コーナー」を新設した。また常時、学園生の活動が伝えられるよう、学園SNS開始の検討を始めた。 ②コミュニティ・スクール委員会及び学園評価担当とともに、学園・学校評価項目の検討・SMPを活用した評価分析に関する研修会を4回実施した。学園・学校評価項目とアンケート項目の整合性を図ることにより、成果と課題が明確化になった。	①学園アンケート結果では、3校が協働して進める内容について、保護者にとって見えにくい状況があり、「肯定回答」あるいは「わからない」の回答が多く見られた。⇒情報提供・説明の在り方を再検討する必要がある。 ②学園アンケート分析から見えた課題は次の4点になる。 ○情報提供、説明の在り方の再検討 ○補充学習の実施方法および内容を含めて、検証が必要 ○あいさつの励行については「自分から進んで」に課題。自己有用感が低い。 ○「生き方・キャリア教育」の内容は、9年間の学びを明確に示す。

検証項目		(3) 小・中一貫教育校としての教育活動 ○小・中学校間相互乗り入れ授業 ○小学校相互、小・中学校間の児童・生徒の交流活動 ○小・中学校教員の合同授業研究等の学園研究会 ○キャリア教育及びそれに基づく小・中の系統性と連続性を明確にした授業実践、授業改善の状況 ○その他	
目標		9年後の義務教育修了を見据えた「15歳の姿に責任をもつ」教育活動を推進する。そのために ①学園研究会を核として、9年間の一貫したカリキュラムの検証を行う。 ②交流活動の充実を図る。	
取組		①「言語活動の工夫」について学園研究のテーマとし、年間3回の学園研究授業、年間11回の学園研究会を実施して、学習活動を系統化する。また、相互乗り入れ授業の充実を図る(小学校教員⇒中1又は中2指導、中学校国語科教員・保健体育科教員⇒小6指導)。 ②児童・生徒交流を豊かに展開し、学園生が共に学び合う意識を向上させる。また、都立高等学校長による生き方教育の勉強会を開催するなど、保護者・地域と共に学園間の連携を図った活動を実施する。	
成果		課題と改善方策	
①学園研究においては、「言語活動の充実」を目指した授業づくりにおける9年間の連続性を意識し、学園全教員が相互に見合う研究授業を年間3回実施した。相互乗り入れ授業については、計画通り実施。乗り入れの教員を固定化することが効果を上げている。27年度は《小学校の教員⇒中1英語補助》が新たに追加。また、中学校音楽科が小学校の音楽クラブの指導を実施した。 ②保護者のアンケート肯定率は、「中学生が小学校行事に参加する」(71%)、「小学生同士、小学生と中学生の交流」(68%)「小学生の中学体験・部活動体験」(54%)であり、児童・生徒は、ほぼ満足している様子がうかがえる。また、地域・保護者が学ぶ場として、「生き方・キャリア教育」講座を実施した。(講師はCS委員) 約100名の参加があり好評であった。		①アンケート項目「9年間の小中一貫カリキュラムに基づいて、系統的な指導を行うこと」「小中学校の教員がチームを組み専門性・個性の高い授業(乗り入れ授業)を行うこと」については、保護者には見えにくく、「肯定回答」または「わからない」の回答になっている。情報提供の課題がある。⇒28年度は、教員の学園研究における授業研究日を「学園公開日」と設定し、教員の取組の「見える化」を工夫していく。 ②児童生徒交流の機会については、学園交流委員会を中心に、より効果的な実施方法、連携の仕方を工夫・改善していく。そのため、交流委員会の担当者を増加する。 地域・保護者が学び合う機会としての教育講演会は、三鷹中央学園のひとつの特色として、28年度以降も計画・実施していく。⇒教職員の参加を増やす工夫が必要。	
検証項目		(4) 児童・生徒の学力・健全育成 ○児童・生徒の学習意欲	

検証項目	
(5) コミュニティ・スクールの運営 ☐ コミュニティ・スクール委員会の組織・運営 ☐ 保護者、地域住民の学校運営への参画の状況 ☐ 学校と保護者、地域住民との連携・交流 ☐ その他	
目標	コミュニティ・スクール委員会の新たな組織を活用し、連携しながら、学校、保護者、地域が一体となった取組を推進し、協議と支援の充実を図り、目指す学園生像の実現に努める。
取組	①役員会(正副会長と3校長)が中心となって、新たな組織を円滑に運営することができるよう、役員会を必要に応じて開催する。事務連絡は一斉メール送信を原則とし、情報の共有化を図る。 ②教員、保護者、地域住民による、学園とコミュニティ・スクール委員会との合同研修会を実施し、学園の取組への理解の促進と周知の徹底を図り、協働化を推進する。
成果	
①グループメールを活用し、情報を共有化し、連絡・調整にあたる時間を削減した。27年度の組織の再編成を踏まえ、役員会を活用し、CS委員会の方向性を共通に理解し、運営にあたった。 ②「三鷹中央学園パワーアップアクションプラン」の周知と確実な実施に向けて100人熟議及び学園評価担当の教員との研修会を4回実施した。 ③保護者会等を活用し、「パワーアップアクションプラン2015」の周知を図るとともに保護者の実践を「保護者の知恵袋」として配布した。	
課題と改善方策	
○よりよい組織の在り方について検証・検討していく。 ○「三鷹中央学園パワーアップアクションプラン」の実施にあたり、コミュニティ・スクールとして、学校・保護者・地域が一体となって取り組むための仕組みづくりと方策をさらに検討・推進していく。 ○三鷹中央学園のコミュニティ・スクール委員会が柱としている活動については、「CSガイド」の理念を踏まえて丁寧に実施していく。 ①防災教育 ②生き方講演会 ③地域人財の豊かな活用(授業の振り返りを含めて)	

平成27年度 三鷹中央学園の評価・検証結果のまとめ

	1 「小中一貫教育」及び「コミュニティ・スクール」の取組において特に成果が得られたこと ○全国からの視察が11件ありました。学園の教育活動(特に「9年間の防災教育」)、乗り入れ授業と学園評価が注目されました。 ○みたかスクール・コミュニティ・サポートネットとの協働により、学園防災副読本「カンガエル地域防災」を活用し、9年間の系統性を視野に入れた防災授業を全学年で実施しました。その学びの実践の場として、地域防災訓練を生かすことができました。この取り組みは次年度以降も継続していきます。 ○学園生のアンケート項目「学校は楽しい」の肯定回答率からは、本学園は、いわゆる「中一ギャップ」が見られないという結果が出ています。これは、学園の教育活動の成果と考えます。
	2 今年度に明らかになった課題のうち、特に次年度の重点とすること ①情報提供・説明の在り方を再検討する必要があります。「3校の教員が連携した指導」「パワーアップアクションプラン」「小中一貫カリキュラム」「相互乗り入れ授業」等のアンケート項目回答は「肯定」または「わからない」と二極化しました。「成果」は出ているが、実施内容の理解度に差があり、内容を理解している場合は、どちらかと言えば「肯定評価」をしています。 ②あいさつの励行では「自分から進んで」に課題が残りました。中学生の「あいさつ」に対する意識が高いのが特徴です。しかし、家庭での達成度と地域の方々に対するものと差が出ました。また、「自分が誰かの役に立っていると思う」の肯定率の低さに課題が見えます。
	3 「2」の重点課題を解決するための改善策 ①アンケート「学園だより・学園ホームページの活用」の肯定回答率は8割であることから、「学園の何を保護者に伝えていくべきか」の検討を踏まえ、より効果的な情報提供をするとともに「学年だより」等の活用を工夫します。また、学園研究日を「学園公開日」として設定します。 ②自らあいさつができないのは、自分に自信がもてないことと関連していると考えます。学校・家庭・地域とが一体となって、学園児童・生徒に自信を持たせる取組や言葉かけを推進していきます。CS委員会としても、この課題に取り組んでいきます。